

2005年1月8日

人間科学研究科委員長 殿

加藤 陽子 氏博士学位申請論文審査報告書

加藤 陽子氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査をしてきましたが、2004年12月21日に審査を終了しましたのでここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名 加藤 陽子
2. 論文題名 現代青年の生き方に関する人間科学的研究 実存的視座に基づいて

3. 本文

(1) 本論文の主旨

本論文は、現代青年を対象としてとりあげ、彼らをとりにくく今日の社会、文化、心理、身体など全体的な状況との関連において、彼らの生き方の特質を実存的な視座から検証することにより、現代社会における青年の様相を解明することを目的としている。実存的な視座を導入することにより、現代青年の生き方についてより包括的な方向性を提示できると考えたからである。

近年、いじめや学級崩壊、不登校などの教育的問題に加え、社会的引きこもりや非就労者、薬物依存、家庭内暴力などが社会問題となっており、現代青年のあり方が憂慮されている。こうした現状を受けて、青年に関する様々な研究が行われてきた。しかし、現在の青年期研究の多くは、社会的な側面または発達の側面のどちらかに焦点を当てたものが多く、各々の領域の研究は詳細で専門的なものとなる一方で、青少年の生き方やあり様について包括的に論じた研究が少ない。

人間は、数えきれない身体的・心理的・社会的・精神的諸要素を抱えながら、相互に極めて複雑に影響し合い、自らの中でそれらを統合し、同一性を見出す存在である。そのため、こうした多様な側面をもつ人間存在を、多種多様な状況・分野ごとに要素に分断するという従来の研究方法では、現代社会における青年の存在は解明しえないだろう。

したがって、以上のような問題を解決するためには、人間の存在全体を視野におさめながらアプローチする「実存」という視座に立ち、彼らを捉え直すことが

必要だといえる。複雑な現代社会においても、主体的に自らの人生を選択し、実践していくという、人間の積極的な精神的・健康的側面に着目する実存的視座をもつことこそ、消極的なイメージで捉えられがちな現代青年を、従来の研究とは異なる視点から語るうえでの1つの有効な手立てとなるであろう。

現代青年は、心的負担のコントロールという消極的な適応方法を身につけていると指摘されている。しかし、彼らは高学歴化する社会の中で大学生活を送ることや一時的に不登校という形をとること、あるいは親と同居することによってモラトリアムに安住する傾向にあるものの、実存的な視座から捉えた場合、生き方やあり方に対する関心は失われていないのではないかと。むしろ、そこには生き方やあり方への積極的意味づけである実存的な態度が見受けられるのではないかと考えられる。これが、本研究の仮説となっている。

(2) 本論文の概要

本論文の考察には、大きく分けて2つの論点がある。第1は、現代青年をめぐる社会的状況の把握である。第2は、現代青年の特徴を端的に示していると思われる大学生、不登校児童・生徒、同居未婚子などについて、その実態を明らかにするとともに、そこにみられる実存的な生き方の可能性を探ることである。

まず、最初の論点である、近代産業社会における青年の発達過程と現代青年をめぐる社会的状況の把握について、第1章「現代青年における今日的ジレンマの様相と実存的視座」において、国内の10代前半～20代後半の青年に関するライフスタイルの変化や社会意識にまつわるデータを用いて検証する。加えて、本論文独自の視点としての実存的視座について学説史的な観点から詳細を述べ、その概念について整理する。

第2の論点である現代青年の実態の把握であるが、第2章「大学生の現代性に関する実存的考察」で、戦後の若者論を踏まえ青年の存在について文化的視点から整理する。そして、無気力な若者像の中心的存在として取り扱われてきた大学生に焦点を当て、量的・質的調査を用いて実存的な視座から彼らの現状を明らかにする。特に、90年代に入って注目され始めた、自己の拡散化や親密性の分散化といった議論を中心に、大学生にそうした傾向が見られるのかどうか分析する。

第3章「生き方を通して見た不登校問題 不登校問題の心理・社会的分析」では、学校教育という現代青年の生き方を語る上では重要なファクターであり、かつ無気力な青年像の1つの具現化された形として、今なお大きな社会的問題となっている不登校問題を取りあげる。ここでは、学校という精密に制度化された組織の中で生きる子どもたちと、彼らが抱える問題点について整理し、不登校の要因について分析する。そのために、本論文ではあえて「不登校にならなかった者」の不登校にならなかった理由を取りあげている。こうした作業を通じて、無

気力など現代青年に特有の苦悩が不登校問題とどのように関連づけられるのか、さらには不登校にならなかった者に必要とされたものは何なのかを明らかにする。

次に4章「同居未婚子と高齢者の関係性 モラトリアムを許容する親たち」では、より広い視点をもち青年の生き方を世代間関係として捉えるべく、青年期における多様化するライフスタイルの象徴ともいえる同居未婚子を取りあげる。同居未婚子は、モラトリアムに安住する傾向のある現代青年の特徴をライフスタイルとして体現していると考えられる。そのため、彼らを通して、現代青年のモラトリアム的生き方とはどのような実態であるのか、またどのような意味を持つのかということについて分析する。

最後に終章「現代青年の生き方に関する実存的態度」では、再度、消極的と見られがちな現代青年像にアプローチするために、「消極的な生き方」をしている属性の異なる青年たちへのグループインタビューを行い、消極的な現代青年像の問題点を探り、これまで述べてきた論点を踏まえた総括を行う。

(3) 本論文の評価

以上のような構成にもとづいた本論文が到達した結論は次のように要約できる。すなわち、場当たりの消極的に見える現代青年という指摘は、現代青年の全体の様相を捉えきれておらず、むしろ現代青年の内面には、自らの生き方を模索しようとする“生き方に関する実存的態度”が存在していること、そして、それをもとに内面において自らの生き方に積極的意味づけを行っていることが明らかとなった。

本論文においては、消極的な現代青年という従来の視点を脱し、実存的な視座から現代青年の様相を多角的・包括的に考察した結果、彼らの生き方を積極的な側面から捉え直すことが可能となった。こうしたことから、現代青年の様相を捉えるうえでの1つの新しい機軸を見出したといえる。この点が本論文の結論であり、かつ評価すべき第1の点である。

第2に、本論文で実存的な生き方にアプローチするために、実存的諸概念や実存心理学について検討を加えていることはいうまでもないが、同時に現代社会の諸条件を重視して分析を試みており、本論文は心理学的・社会的な総合研究の性格をもつといえる。その意味で、本論文は現代青年に関するすぐれた人間科学的研究として評価することができる。

第3に、本論文は「実存的」という哲学的なキーコンセプトは用いてはいるものの、方法自体は実証的であり、データの入手方法が極めてユニークなアイデアによっている点も高く評価することができる。それは、不登校にならなかった学生、高齢者と同居する未婚子、消極的な生き方をしている青年などを対象にしてデータを得ているところに見て取ることができる。

第4に、第1の点とも関連して、本研究では、従来の心理学的あるいは社会的な方法では解き明かすことのできなかつた現代青年の生き方へのアプローチが、方法的な工夫によってかなり成功している点をあげることができる。かつてアメリカの社会学者D. H. ロングは、「過剰に社会化された人間像」を提起して社会学の批判を試みたが、そのひそみにならえば、過剰に心理化された人間像という批判も成り立つであろう。もちろん、申請者がこの点を明示的に論じているわけではないが、1つのディシプリンに過剰に依拠した人間把握ではなく、人間をより多面的かつ総合的に捉えようとする意図が、本論文のモチーフとして働いていることは確かである。この点が、本論文の方法的な独自性として評価できる。

とはいえ、本論文では、特定の限られた青年だけを対象にしている点、取りあげた概念の検討が十分でない点、現代青年の生き方の実態面および実践面の検証が十分でない点など、今後に残された課題は多い。しかし、このことが本論文の評価と独自性を決して損なうものではない。

以上のような本論文の評価にもとづき、本審査委員会は加藤 陽子氏の学位申請論文は、博士(人間科学)の学位を授与するに十分に値するもとの結論に至った。

以上

加藤 陽子氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査委員 早稲田大学教授 博士(人間科学)(早稲田大学) 嵯峨座晴夫

審査委員 早稲田大学名誉教授 文学博士(早稲田大学) 濱口 晴彦

審査委員 早稲田大学教授 博士(人間科学)(早稲田大学) 蔵持不三也